



(木村原圖)

あかめがしは (*Mallotus japonicus* MUELL. ARG.) あなざり (*Firmiana platanifolia* SCHOTT ET ENDL.) あかがし (*Quercus acuta* THUNB.) しひ (*Passania Sieboldi* MAK.) 及ビ あかざ (*Chenopodium album* L.) ノ嫩葉面ノ毛茸並ニ腺(擴大) ●(1) あかめがしは、葉ノ裏面ノ星狀毛、●(2) 同、腺毛(色素ヲ含マズ)、●(3) 同、表面ノ星狀毛ノ平面圖、●(4) 同、表面ノ星狀毛、●(5) 同、裏面ノ腺毛 ●(6) あなざり、葉ノ表面ノ星狀毛、及ビ(7) 腺毛(色素ヲ含ム)、(9) 同、表面ノ腺毛、(8) 同、裏面ノ星狀毛ノ側面圖 ●(10) あかがし、細長キ星狀毛 ●(11) しひ、鱗毛ノ側面、及ビ(12) ソノ平面圖 ●(13) あかざ、腺毛ノ平面、及ビ(14) 側面圖、(13') (14') ハ破壊シテソノ内容物ヲ失ヘルモノ

紅イ色素ヲ含ンデ居ル、(四)あかざノ嫩葉ヲ見ルニ白色、桃黃色又ハ薑桃色等ノ美シイ光輝アル粉末デ蔽ハレテ居ル是レハ球形、卵形、瓢形等大小ノ腺毛ニ色素ノ溶液ヲ滿シタモノ或ハ其肥大破壊シタモノガ密生シテ居ルノデアル此ノ薑桃色ノ色ハ鹽酸々性ニ於テ變化ナク「アルカリ」ニ由テ薑色ヲ經テ黃色トナル、黃色ニナツタバカリナラ鹽酸ニヨリ復色スルガ暫ク放置シタモノハ復色セズ「マグネシウム」ヲ投ジテモ褪色スルバカリデアル

## ○我等が敬愛セル梅村甚太郎先生ノ事ドモ

中京植物學會々員 吉川芳秋

本誌ノ主筆牧野富太郎先生カラ梅村甚太郎先生ノ小傳ヲ書ケト頼マレタノハ春モ餘程更ケタ新緑野邊ニ馨ル五月頃ノコトダッタ

其當時ハ何ノ氣無シニ書ケタラ書イテ見ヤウトツイ陽氣ノ加減デウツカリ引受ケテシマツタガ何ガ扱テ書カウ  
トイフ段ニナルトサア大變ダ困ツタノ百遍モ連發シテミタトコロデ追ツツカナイ揚句ノ果テハ月並ミナ誰デモ  
知ツテキラレルデアラウト思フ身邊雜記ヲ以テ其責ヲ塞グコト、シタ



梅 村 甚 太 郎 君  
昭和二年一月撮影

膽寫版雜誌『植物界』ノ創刊號ノ題字ヲオ頼ミシニ大正十三年五月半バノ頃其居ヲ名古屋ノ東郊御器所町東脇  
ニ御尋ネシタノガソモソモデアアル以來屢其宅ヲ訪ヅレルガ何時モ元氣デ愉快ニ親切ニ色々ト教ヘテ下サル、

我等ガ敬愛セル梅村甚太郎先生ノ事ドモ

私ガ梅村先生ヲ知ツタノハ我が十三四  
歳ノ頃ダツタト思フソレハ私ノ祖母ガ  
ヨク頼レテハ先生ノ宅ヘ參ルモノダカ  
ラ母モ昵懇ニナツテ嘗テ明治四十三年  
ニ名古屋鶴舞公園デ第十回關西府縣聯  
合共進會ノ開催サレタ時ナドニハ奧サ  
ンノ御供ヲシテ行ツタ事等ガアル又先  
生ガ愛知縣師範學校カラ三州岡崎ノ師  
範學校ヘ移ラレタ時等ニハ私ノ家ヘ一  
時書物ヤ標本ヲ預ツタ事モアツタサウ  
デアアル斯ウシタ關係デ私ガ植物ヲ物數  
寄ニヤルヤウニナツテカラハ段々先生  
ノ名ヲ記憶スルヤウニナツタガ然シ初  
テ見參ニ入ツタノハ私が今ヤツテキル

我等が敬愛セル梅村甚太郎先生ノ事ドモ

先生ハ文久二年ニ三重縣志摩國鳥羽<sup>トバ</sup>町日和山ノ傍ラニ生レ幼時母親ヨリ紫金牛<sup>やぶこし</sup>ハ溜飲ノ妙藥デアルトカ或ハ木槿<sup>くきん</sup>ノ白イ花ガ下痢ニキク等ト色々ナ草木ニ關スル事ヲ聞カサレテ非常ニ興味ヲ覺エヤ、長ジテハ伊勢ノ有名ナル本草家西村廣休翁ヲ師トシテ本草學ヲ學ビ更ニ其門人等ト共ニ南伊勢ノ鬼ヶ城ナドニ採藥セラレ其後ハ單獨ニテ勢州菰野山、江州伊吹山、野州日光、陸前松島等ニ遍歴採集シ後年尾張名古屋ノ有名ナル本草學者伊藤圭介博士ノ門人トナリ就テ藥草ノコト等ヲ學ビ傍ラ日光山中ヤ加賀ノ白山ヤ豫州ノ石槌山ヤ又信州ノ御嶽、駒ヶ岳等ニ採集シ或ル時ハ深山ニ道ヲ失ヒ星ノ下ニテ胸籃ヲ枕トシ淋シイ鼻ノ音ヲ聞テ夜ヲ明カシ又或ル時ハ風雨ニ惱マサレナドシテ常ニ研究調査セラレタ又牧野先生ニハ長イ間屢標本ヲ送ツテ其名稱ヲ質問セラレタ

先生ハ本誌ノ牧野先生ノ如ク全クノ獨學デ今日ノ地位ヲ羸テ得タ人デ若イ時ハ鷄鳴ニ起キテ夏ナド外カラ歸レバ冷水ヲカブリ直グニ勉強ニ取リカ、ツテ入浴ハ時間ガ費ルト言ツテ減多ニシナイ今デモ夏ハ四時ニ起キ冬デモ六時ヨリ晚ク起キルコトハナイソシテ夜分ハ身神ノ疲勞ヲ恐レテ成ルベク十時マデニ寢ルコトニシテ居ラレルガ若イ時分ハ夜ヲ徹シテ勉強セラレ檢定試験ヲ受ケ多年師範學校、中學校、女學校、商業學校、國學院等ニ教鞭ヲ執リ子弟ヲ教育セラレタガ尙傍ラ愛知縣史蹟名勝天然記念物調査委員トシテ縣下ノ天然記念物ヲ一人デ引受ケテ居ラレルノデ其ノ調査ヤ報告書ナドノ作成ニ常ニ忙シイ

然シ先生ハ斯ノ如キ多忙ノ身ヲ以テ尙多クノ著述ヲ物セラレテキル、理學博士武田久吉氏ハ嘗テ雜誌『科學知識』ニ於イテ「富士山の植物」ノ題ノ下ニテ「明治の中年以後には、富士に植物を採る人々も彌々増加したが、就中名古屋の梅村甚太郎氏は、富士の植物に大なる興味を有し、年々登山して採集すること幾回なるを知らず、

遂に『富士山植物目錄』を編んで上梓された(明治卅五年)。これには顯隱兩類の植物總計一千六十二種を擧げ、加ふるに各種についてその産地を明記し、特殊のものは巻頭に寫生圖を挿むであつて、富士植物を研究する人士には無二の好侶伴である。筆者も常に之を携帶して富士に赴き、多大な裨益を受けたのであるが、現今絶版

で中々手に入れ難い。然るに昨年の震災當時手澤の書を焼かれてしまったのは、返すくも遺憾である。」トアル如ク先生ガ長イ月日ヲ費シ苦心シテ生ンダ此『富士山植物目錄』ハ明治三十五年ノ夏八月一日ニ東京市神田區鎌倉町三番地東洋社カラ發行セラレタ携帯用ノ小本デ附録トシテ「富士山植物分布」及「登山案内」ガ附イテキテ富士登山者ニトツテ便利デアルト共ニ又植物愛好家ノ好同伴デアッタ、此ノ書ハ前ニ武田博士ガ叙ベラレタ如ク發行後ニ絶版トナッタノデ先生ハ再ビ大正十二年七月廿五日ニ『富士山植物誌』ナル一書ヲ發行シ世人ノ渴望ニ應ゼラレタ此ハ前ノ『富士山植物目錄』ニ大増補ヲセラレ多數ノ寫眞版ヲ挿入シ解説ヲ下シタモノデ富士ニ登ラン人々ノ見逃シ可ラザル書物タルト共ニ學界ノ寶デアラネバナラヌ先年東京植物學會ハ先生ノ「富士山ノ大宮口ニ於ケル植物分布ノ狀態」ヲ調査シタ報告書ニ對シ賞牌ヲ贈ッタノモ所以アル事デアル此ノ他先生ノ著述トシテ前記『富士山植物誌』以上ノ苦心ヲ要シテ完成サレタ『民間藥用植物誌』（壹卷、三版迄發行、初版ハ大正五年三月）ヲ始メトシテ牧野富太郎先生ノ校閲セラレシ『新編食用植物誌』（壹卷、東京成美堂發行、絶版）明治三十八年十一月第一編ヲ發行シ爾來五ケ年ヲ經テ成レル『常用救荒飲食界之植物誌』『普通有毒植物誌』『吾帝國ニ珍ラシキ愛知縣產草木ノ話』最近デハ『東邦藥用動物誌』ガアル又明治十五年頃ニハ『小學手鞠唄』ガアリ同二十二年頃ニハ『昆蟲植物採集指南』等ノ諸書ガアル尙草稿トシテハ『續民間藥用植物誌』『白山植物誌』『増訂木曾採藥記』『日本ノさのこ圖説』等ガアル先生ハ近時此等ノ書物ヲ自家デ出版發行セラレ屋號ヲ任他樓（甚太郎）ト名付ケテ諸書ニ其名ガ出テキルノヲ見ル先生ハ又有名ナル小野蘭山翁ノ蘭ト師西村廣休翁ノ號寒泉ノ泉トヲ取ツテ蘭泉ト號シ自著『民間藥用植物誌』ノ諸處ニハ和歌ガアル今其ノ一ツ二ツヲ茲ニ掲ゲテ見ルト

○牛蒡こそ中風脚氣あしなえてよわく力のなきに用ふれ

○こんにやくは萬くさ風瘡ほろしきく出で、瘡がるによし

蘭 泉  
蘭 泉



勢神宮ノ植物ノ調査ニ見エラレタ際ニ私ノ恩師故西村廣休翁ノ遺跡ヲ弔セラレタ節ソノ趾ガ今ハ郡役所ト變化シタルニ驚カレ殘ッタふ(楓)ガ勢ヨク生長シ又ばくちノ木ガ遺ツテ居リかつらハ移サレテ一寺院ノ庭前ニ植エラレテ居ルノヲ認メラレテ態々封中ノ三ツノ葉ハ翁ノ遺愛ノ樹カラ採ッタモノデアルトテ私ノ手許マデ御心ニカケラレテ御送リ下サレタルモノガ此モノデアリマス往昔ヲ回想スルト同時ニ牧野先生ノ御芳情ヲ感謝シ記シテ翁ノ靈ニ告グ大正十四年十二月廿八日故西村翁ヲ祭ルノ日梅村甚太郎謹識」

噫先生ノ師ニ對セラル、心ノ花ヨリモ美シク水ヨリモ尙清キコトヨ

私ノ母ノ話ニ祖母ガ先生ノ宅ニ參ッタ頃先生ハ澤山ノ債券ヲ買ツテ持テ居ラレタソウデアアルソシテ奥サンハ買物ナンカニ餘リ出ラレナイデ先生ガ學校ノ歸リガケニ買ヒ込ンデ歸ツテ來ラレタソウダ、朝ハ病氣デナイ限り三十有餘年ノ今日迄自ラ早起シテ飯ヲ焚クノヲ役目トシテキラレルトカ一寸變ツテキル、此ノ外先生ハ年少ノ頃カラ日記ヲ必ズ附ケテドンナ急ガシイ日デモ務メトサレテキルノデ今日迄ニ墨書サレタ日記帳ハ堆積シテ書齋ノ一偉觀ヲ呈シヨク私ニ私ガ死ンデモ日記ガ附ケテアルカラ昔ノ本草學者ノ傳ノヤウニ苦心シナクトモ私ノ傳記ヲ作ルコトガ出來ルナドト言ツテ笑レルコトガアル然カモ其ノ日記ハ通常ノ人ノ附ケルヤウナ簡單ナモノデナクテ實ニ精細ヲ極メタモノデ元旦ナンカハ葉書ノ來タ人ノ姓名カラ一寸面白イト思フト其ノ文句迄寫シテ置カレルソシテ差出シタ葉書モ亦其通りデアアルカラ日記ヲ附ケルダケデモ尋常ノ技デハナイ

先生ニハ三男二女ガアッタガ長男魁君ハ東京帝國大學醫科ノ四年ニマデ進ンデ腸「チブス」ニ斃フレ次男馨君ハ中學ト電氣學校トノ卒業證書ヲ枕頭ニ置イタ儘病死スルナド實ニ慘又慘ノ極ミデアアル當時ハ先生モ全ク瘦セテ氣力モ失セ果テ見ル人々哀レニ思ハヌハ無カッタガ然シ先生ハ打續ク不幸ノ中ニモ今二十歳ニナラレル長女ヲ頭ニ一男二女ヲ引連レテ勇氣百倍自己ノ天職ノ希望ケ岳ヲ指シテ六十有餘ノ老軀ヲ以テ淋シクモ亦雄々シク再ビ船出セラレタノデアアル



葉ノLappa (Arctium Lappa L.) ケン受テ害電

斯クテ一點ノ光明ヲ得タル先生ハ法ケ梨(學名ピルス・ジ  
ンタロウアナ) いつまで梨(學名ピルス・ウメムラナ)ノ  
名ト共ニ豐榮昇ル大君ノ御國ノ續カン限リ在ラン限リ千  
代萬代イツマデモイツマデモ輝クコトデアラウ  
船ハ出デ行ク船ハ出デ行ク人生ノ航路ヲ指シテ悲喜交々  
ノ人々ヲ乗セ浪路遙カニ進ンデ行ク先生ノ淋シクモ亦健  
氣ニ進ム晩年ノ道將タ何レニカアル幸ニ無常ノ風ノ絶エ  
絶エテ浪靜カナレカシト祈リツ、惜シキ拙キ筆ヲ擱ク

## ○杜仲軒赭鞭夜話 (七)

久 内 清 孝

### 降電ノ實例

初夏ノ候降電々々ト言フコトヲヨク耳ニスルガ其降電ト  
云フ事實ノ大ナルコトハ其實際ヲ見タ人デナイトお話ニ  
ナラナイ、學校ナドデ幾ラ電害ノ話シタリ新聞紙ニ電害  
ノ大キナ通信記事ガ出タノヲ見タ處デ降電被害ノ實例ヲ  
目睹シ得ナイ地方ノ兒童ナドニハ想像モツクマイ、余ハ  
昨年五月十五日正午過ぎ頃採集ニ出デ幸カ不幸カ大降電  
ニ會シ東京地方ヲ襲ッタ有様ヲ目撃シ其被害區域ヲ一巡